



ケーススタディー

オープンイノベーション



23



ソマールが手がける細胞認識性バイオマテリアル製品「Eカドヘリン Fc コーティングプレート」

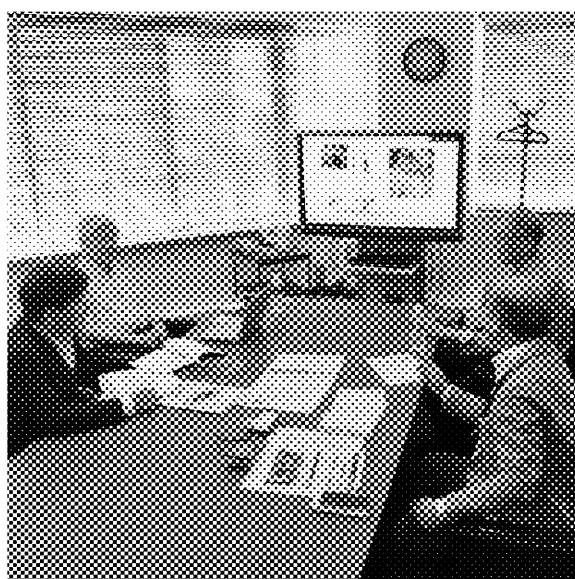
ソマール・東京科学大学

ソマールは主力の化学品販売の延長で、再生医療関連のビジネスを模索中だ。バイオマテリアル（生体材料）を手がける東京科学大学の赤池敏宏名誉教授と十数年来、共同研究を続けている。特定の細胞にのみ認識されるという生

開発には、生体を構成する組織の一つ、上皮組織の細胞同士を接着するたんぱく質「Eカドヘリン」を活用する。応用の一つにドラッグデリバリーシステム（DDS）がある。薬剤を包み込んだDDSの表面に、Eカドヘリンを結合させ、肝実質細胞に認識されるターゲットングDDSとして生かす狙いだ。

Eカドヘリンはポリスチレンやポリエチレンのシャレー、ビーズ、ファイバーなど多様な形状の素材に塗布し固定できるよう設計されている。いわば細胞の「足場」として、特定の細胞の接着・剥離を自在に制御できる。

さらに「Nカドヘリン」と



再生医療について意見交換するソマールの曽谷太社長（左）、東京科学大の赤池敏宏名誉教授（左から2番目）ら

再生医療へ細胞認識材料

脳疾患治療など支援

研究開発に携わるのは望月都男バイオマテリアル室長ら数人で、同社は総額数億円を投じてきた。曽谷社長は「医療分野は社会的意義が大きく成長性もあり、先行的にチャレンジを獲得できればよい」とし、今後も地道な取り組みを続けていく。

（編集委員・山中久仁昭）